



東北大学 史料館 だより

No.17
2012 Sep.

TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER



東北帝国大学理学部向山観象所



Index

- 2 魯迅のいた日
東北大学史料館長 佐藤弘夫
- 4 自校史教育と史料館
東北大学高等教育開発推進センター
講師 中川 学
- 6 企画展記録
・日本有機化学研究のパイオニア 真島利行資料展
・記録のなかの復興と再生—東北大学の戦災復興資料から—
- 7 資料の公開について
- 9 史料館のうごき
- 10 お知らせ
・史料館の改修と一時移転について
・Twitterはじめました

写真：理学部向山気象観測所新館
／昭和10年（1935）頃か
資料：「理学部附属向山観象所二専任観測者ヲ置クニ要スル経費」
『昭和九年度概算書（部局提出ノ分）』より

昭和初期の災害と東北大学

東北大学では、昨年3月の東日本大震災以降、国内外の大学・研究機関と協力し、被災地の復興・再生に貢献するための様々な取組を行っていますが、昭和戦前期にも災害時における大学としての役割が問われた時代がありました。今から約80年前の1933年（昭和8）3月に起きた昭和三陸地震とそれに伴う三陸大津波が発生した際、東北帝国大学では、1934年度分の概算要求において「向山観象所専任職員配置」の経費を要求しています。附属向山観象所は、1912年に向山に設置されて以来、気象と地震の観測を行っていましたが、専任の所員、独立の経常費が措置されておらず、災害発生時は日常必要な観測も放棄しなくてはならない状態でした。概算要求には「先ヅ専任職員若干ヲ置キ津浪ノ実験的研究並ニ実際資料ヲ収集セシメ又地磁気及地電気観測ノ指導監督ニ任ゼシム」とあり、その経費を求めています。東北振興調査会の答申も後押しし、その後、向山観象所は1938年に要員増と独立の経常費が認められ、本学における地球物理学研究の礎となり、災害予知の研究が一層進展していくこととなります。

魯迅のいた日

東北大学史料館長 佐藤弘夫



この4月に佐藤伸宏前館長の後を承けて、新たに史料館長に就任いたしました文学研究科の佐藤弘夫です。

私の専門は日本の思想と文化です。もとは古い時代が専門でしたが、最近は妖怪・幽霊・ゆるキャラなどの現代文化の研究にも手を染めています。製造業の世界では、日本はかつての全盛ぶりが影を潜めてしまいましたが、漫画やアニメ・ゲーム・キャラクターなどのサブカルチャーの分野では、いまでも海外で圧倒的な人気と影響力を保持しています。日本の古典文化に対する関心も根強いものがあり、そのため私もしばしば国外に出て、日本学を専攻する外国人研究者や学生と交流を深めています。

ここ数年、中国に行く機会がなんとかありました。中国で初対面の方と名刺交換をすると、私の肩書きの「東北大学」という文字をみて多くの方々が異口同音に口にされるのは、「魯迅先生が留学された大学ですね」という言葉です。年配の方だけでなく、大学院生クラスの若い人たちもみな魯迅と東北大学を知っているのには驚かされました。聞いてみると、中学校の教科書で魯迅の作品である「藤野先生」を読んでいるということでした。東北大学は魯迅を通じて、中国において高い認知度をえているのです。

魯迅（本名周樹人）は1904年（明治37）、医学の道を志して、東北大学の前身である仙台医学専門学校に入学しました。中国から本学に留学した最初の留学生でした。おりしも日露戦争の最中でした。日本国中がナショナリズムに沸き返っていたなかで、魯迅は祖国を舞台とするこの戦争に複雑な思いを抱かざるをえませんでした。また医専初めての外国人留学生ということもあって、下宿や学校でいろいろと不快や不便な思いをしたようです。

そうしたなかで、魯迅に目をかけ、懇切に指導したのが医専の藤野巖九郎教授、いわゆる「藤野先生」です。藤野教授は当時まだ30歳、教授昇任は魯迅入学のわずか二ヶ月前でした。彼は魯迅の講義ノートに添削を施し、それは自分の担当以外の教科にも及びました。また、魯迅が文学の道に進むべく学業半ばで仙台を離れるにあたっては、裏に「惜別」二文字を記した自身の写真を送りました。魯迅は後に、この写真を北京の自宅にある机の正面に飾り、疲れたときに眺めては「良心」と「勇気」を目覚めさせたと「藤野先生」のなかで記しています。

こうしたご縁から、東北大学は中国から魯迅を偲ぶために訪れる、数多くの来客をお迎えしてきました。1998年には江沢民中華人民共和国主席（当時）が来訪され、魯迅が学んだ階段教室や留学時代の記録を展示した記念資料室（いまの史料館）を見学し、本学に自作の漢詩を寄贈されました。

東北大学史料館では魯迅を介した日中交流の歴史を踏まえ、その伝統を顕彰すべく、昨年7月19日に史料館内に「魯迅記念展示室」をオープンさせました。ここには魯迅が仙台にいた一年半のあいだのものを中心に、40点ほどの資料が展示されています。医学を学ぶべく入学してから、文学による中国民衆の精神の改造を志して医専を離れるまでの、魯迅にとってその人生の重大な岐路となった仙台時代の足跡を追うことができるようになってきました。在学中の成績表や藤野先生が添削した解剖学ノート、魯迅自筆の書幅などの貴重な資料も、ここでみるすることができます。

日本の大陸侵攻に端を発する近代の日中関係は、政治的にはきわめて厳しい対立の続いた時代でした。それは今日においても、根本的には解決していません。そうしたなかで、いまから100年前に、魯迅の母国で

ある中国の学芸に対する敬意を抱いていた藤野先生と、その師を深く尊敬する学生・魯迅との間に育まれた友誼の心情は、私たちに国家や民族という次元を超えた信頼関係構築の可能性を教えてください。そして、私たち一人ひとりが現代の藤野先生と魯迅となることを目指し、新たな国際友好の架け橋を築くための第一歩を踏み出す力と勇気を与えてくれるにちがいありません。

史料館は魯迅のような著名人に関する記録だけでなく、大学にかかわる重要な公文書を選択して保存するとともに、大学全般の歴史的資料を収集・保存・公開する機能を担う機関です。こういうとなにか難しい仕事をしているように聞こえるかも知れませんが、決して敷居の高いところではありません。片平に来る機会がありましたら、ぜひ気軽に足を運んでいただきたいと思います。

史料館の本館は1924年（大正13年）に竣工したかつての付属図書館です。二階の展示室は、もとの閲覧室です。その天井は、緩やかにアーチを描いて伸び上がっています。こうした品位と余裕を兼ね備えた建物は、いまの日本の大学では建てるのが容易ではありません。実際にその場所に立ち、高い天井を仰いで、大志を抱いて読書と勉学に打ち込んだ先人たちの思いを感じ取って下さい。展示された数々のセピア色の写真から、かつての東北大学と旧制二高などの包摂校の姿を偲んでください。東北大学の百有余年の伝統の構築に、どれだけたくさんの人々が関わってきたかに、思いをいたしてください。

史料館周辺の片平キャンパス内には、大学に関連する古い史跡や記念碑が散在しています。外側からのフェンス越しになりますが、魯迅の階段教室もみることができます。正門を出て右手へ、高等裁判所の方向に向かって200メートルほど行ったところには、魯迅が最初に下宿した「佐藤屋」が往時の姿を留めています。魯迅がその書簡に、「毎日食べさせられるものは、いつも魚ばかりです」と記した下宿屋です。

広瀬川に向かって米ヶ袋方面に足を伸ばせば、『三太郎の日記』の著者として知られる元文学部教授、阿部次郎の記念館もあります。史料館には探索に便利なように、これらの所在地を記した地図が掲示してあります。史料館を起点した散策コースとしてご活用いただければ、幸いです。

このように書いておきながらたいへん申し訳ないのですが、史料館本館は東日本大震災で受けたダメージからの修復工事のために、8月から来年春までお休みさせていただくことになっております。史料の公開等の業務については、場所を図書館に移して秋に再開する予定です。具体的なスケジュールなどについては、史料館のホームページをご覧ください。

来年の春に、皆さまと新装なった本館で再びお目にかかれましてを楽しみにいたしております。



魯迅最初の下宿「佐藤屋」

自校史教育と史料館

東北大学高等教育開発推進センター講師 中川 学



自校史教育とは

自校史教育、これは学生に自らが所属する大学の歴史に関して学んでもらうための教育活動を指すものです。この自校史教育という授業科目は、近年では多くの大学で実施されています。

2007年から発足した東北大学の自校史教育は、大学アーカイブスである東北大学史料館と密接に関わる形で展開してきました。以下では、東北大学における自校史教育の活動と史料館との関わりについて紹介することとします。

「歴史のなかの東北大学」から2つの新たな授業科目へ

『史料館だより』第10号において安達宏昭氏がすでに紹介しているように、2007年4月から自校史教育に関する授業科目「歴史のなかの東北大学」が開講しました。これは、史料館の永田英明氏を中心に、『東北大学百年史』の編纂に関わった教員8名によるオムニバス方式の授業で、おもに1、2年生向けの全学教育

表 自校史関係の授業科目

講義名	歴史のなかの東北大学 (2007～2010)	東北大学を学ぶ (2010～)	"History of Tohoku University" (2011～) ※以下、原文は英語	東北大学のひとびと (2011～)
1	ガイダンス (大藤修)	ガイダンス	ガイダンス	ガイダンス (中川)
2	片平キャンパスと史料館見学 (永田英明・曾根原理)	東北帝大成立「前史」一学都仙台とは	学都仙台	初代総長・澤柳政太郎と狩野亨吉 (中川)
3	大学の歴史 (羽田貴史)	東北帝国大学の誕生	東北帝国大学の誕生	科学者たちの仙台一本多光太郎・八木秀次 (永田)
4	明治時代の「学都」仙台—東北大学誕生前夜 (永田)	門戸開放	門戸開放	文系の学風をつくる—阿部次郎と小宮豊隆 (曾根原)
5	東北大学の誕生とその理念 (中川学)	附置研究所の誕生	総合大学への道 (1)	チベットから仙台へ—多田等観と河口慧海 (曾根原)
6	創立期の東北帝国大学と社会 (中川)	総合大学へ	総合大学への道 (2)	奥羽史料調査部の人々—地域史研究の先駆け (柳原)
7	総合大学としての確立—法文学部設置と図書館 (曾根原)	学生生活	学生生活	巨大地主・斎藤善右衛門—地域名望家と大学 (中川)
8	東北帝国大学の学生生活 (柳原敏昭)	留学生と仙台・東北大学	フィールドワーク (1) 附属図書館と書庫見学	木下柰太郎と医学部生 (柳原)
9	女子学生の歴史と「門戸開放」 (永田)	戦争と大学	留学生と仙台・東北大学	時代を拓く女子学生たち (永田)
10	留学生と東北大学—戦前を中心に (永田)	戦後改革と新制東北大学の発足	戦争と大学	陶晶孫とその時代—戦前の留学生たち (永田)
11	戦時下の東北大学 (安達宏昭)	高度経済成長の東北大学	戦後改革と新制東北大学の発足	戦時下の学生たち (安達)
12	戦後改革と新制東北大学の誕生 (羽田)	キャンパスの変遷	キャンパスの変遷	戦後の医学部群像 (曾根原)
13	川内・青葉山キャンパスの誕生と大学改革 (羽田)	大学紛争と大学改革	フィールドワーク (2) 史料館見学	史料館見学 (永田・曾根原)
14	東北大学の現在・過去・未来 (野家啓一・東北大学理事)	創立百周年と大学の理念	大学の理念	試験
15	試験	試験	試験	

- 1、() 内は担当教員名。「歴史のなかの東北大学」の内容は2010年度2セメスターのもの。
- 2、「東北大学を学ぶ」の内容は2012年度1セメスター (中川担当の授業) のもの。
- 3、「History of Tohoku University」の内容は2011年度2セメスター (中川担当の授業) のもの。
- 4、「東北大学のひとびと」の内容は2011年度2セメスターのもの。

科目（カレントトピックス科目群・代表永田英明）として、年に1コマ実施されていました。

そして、2010年4月、新たに自校史関係の科目が加わりました。これは同年3月、百年史編纂事業の終了に伴い、百年史編纂室に所属していた私ともう1名の教員が高等教育開発推進センターに配置換えとなったことを契機としたものです。部署は全学教育推進部・人文社会科学教育室という、おもに1・2年生を対象とする、人文系の全学教育を担当するところで、開講に際しては木島明博・同センター長から、『東北大学百年史』編纂の成果を全学教育のなかで学生に還元してほしい、できるだけ多くのコマ数を担当してほしい旨の要請がありました。

その結果、生まれたのが、年間8コマを2名の教員が分担する「東北大学を学ぶ」です。これはオムニバス形式ではなく、教員個人が1コマ（15回）をとおして担当する自校史教育の授業科目（基幹科目）です。これらは共通のシラバスに基づいて実施されており、その授業の目的には「東北大学がどのような歴史を歩んできたのかを学ぶことによって、大学の特徴や個性を歴史的に理解すること」等があげられています。

表は「歴史のなかの東北大学」と対比する形で、自校史関係の授業科目をまとめたものです。「歴史のなかの東北大学」は、全体として時系列的に大学の歴史を追うテーマ配置に、本学の特色として語られることの多い「門戸開放」などのトピックを加えた構成をとっており、学生生活・留学生といった「学生」の視点から大学を考える内容が多いことが特色と評価されてきたものです。

「東北大学を学ぶ」では、「歴史のなかの東北大学」の全体構成や特色を継承するとともに、『東北大学百年史』編纂による新たな成果を取り入れております。たとえば、「通史」のなかで明らかにされた大学の理念の問題を取り上げたり、「資料」に掲載した基本史料や統計・画像資料などを、毎回の配布レジュメに提示しました。もちろん、史料館の東北大学関係写真データベースなどの諸資料データベースも同講義に活用されており、その意味で史料館の諸活動ともリンクしています。そして、もうひとつ大きな点としては、ひとりの教員が1コマ全体を担当することにより、各授業間の連続性や関連性が明確になるとともに、毎授業時に実施されるミニットペーパー（学生のコメントペーパー）をとおした学生とのやりとりがスムーズになったことが変化としてあげられます。

選択科目である「東北大学を学ぶ」の受講者数は、2010年度は483名（8コマ）、11年度は432名（同）、12年度1 Semester 218名（4コマ）となっており、新入学生数（約2500名）の約17～19パーセントが受講したことになります。

ところで、「歴史のなかの東北大学」と「東北大学を学ぶ」は、その授業内容が大きく重なることから、前者は2010年度で終了となり、新たに「東北大学のひとびと」(カレントトピックス科目群・代表永田英明)が立ち上がりました。この授業は「東北大学に関わる具体的な人物をとりあげながら、時代や環境の中での人間の生き方を、大学や学問とのかかわりという点から学ぶ」(同シラバスより)もので、表にあげたようにオムニバス形式で、教官や学生たちに焦点を当てた授業科目です。

このように、年間1コマの「歴史のなかの東北大学」から始まった東北大学の自校史教育は、その後、東北大学の歴史とその人物誌という2つの新たな授業科目に展開していったのです。

外国人留学生向け授業の開始

文部科学省による国際化拠点整備事業、いわゆるグローバル30に東北大学が参加することとなり、2011年からは外国人留学生向けの英語による授業として、“History of Tohoku University” (担当・中川) が始まり



写真 史料館におけるフィールドワーク

ました。授業計画の策定にあたっては、高等教育開発推進センターの外国人教員に相談したところ、「東北大学を学ぶ」をベースに、学生による“Active learning”をできるだけ取り入れるようアドバイスを受け、その結果、附属図書館・史料館へのフィールドワークの導入といった工夫が加えられました。

“Seeing is believing”（百聞は一見に如かず）。これは史料館見学後に、留学生の1人がコメントペーパーに記したものです。本講義では最終回の前に、史料館見学を設定しましたが、多くの参加学生は史料館の常設展示を見て、それ以前の講義内容を再確認できたと感想に記しています。これは、自校史教育における授業の「振り返り」としての展示見学が、かなり有効な機能を果たしていることを示しています。

「東北大学を学ぶ」では川内・片平キャンパス間の移動時間や受講者数の問題から、取り入れることに躊躇がありましたが、今後は自校史関係の授業科目全体に、史料館へのフィールドワークをリンクさせることが重要ではないかと思われます。

自校史教育のさらなる広がり

さらに2011年からはTASP (Tohoku University Arts and Letters Summer Program) という、アジアやヨーロッパの学生を対象とした、短期のサマープログラムにも英語による自校史教育が取り入れられています。片平キャンパスの史跡探索と史料館見学という学生参加型の講義、“Time Travel Tohoku University” (担当永田・中川) がそれにあたります。写真（前頁に掲載）は2012年7月開催の史料館でのフィールドワークで、参加学生が昭和期の学帽とマントの着用体験をしている様子です。

東北大学における自校史教育は、日本人学生に対する授業のみならず、外国人留学生に対する英語による授業という新たな方向へも広がっています。

参考文献：大川一毅「大学における自校教育の現状とその意義」(『秋田大学教養基礎学教育年報』8, 2006)

安達宏昭「自校史教育の意義と基盤」(『東北大学史料館だより』10, 2009)

湯川次義ほか「『自校史教育』に関する基盤的研究」(『早稲田教育評論』24-1, 2010)

企画展を開催しました……………

●日本有機化学研究のパイオニア 真島利行資料展

(4/17～5/2 企画展示室)

前号でお伝えしたとおり、去る3月、当館が所蔵する真島利行文書および真島利行関係資料（理学部化学教室寄贈）の一部が、大阪大学（総合博物館）の所蔵資料とあわせて「真島利行ウルシオール研究関連資料」として日本化学会の「化学遺産」認定を受けました。そこでこれを記念した企画展を、4月17日から5月2日まで、当館企画展示室で開催しました。

真島利行は、漆の主成分ウルシオールの研究をはじめ、日本の自然界にある有機物を主題に研究を次々と進め日本の有機化学研究の基礎を築いた、戦前日本を代表する有機化学者です。

展示会では①真島研究室で合成されたハイドロウルシオール標本、②大正3（1914）年から昭和34（1959）年にかけての日記、③真島が主に欧州留学時代の明治40年～41年に他の留学生などとやりとりした絵はがきなど、化学遺産の認定を受けた資料を中心に、真島博士の人と学問を知ることができる関係資料を展示紹介しました。期間中の見学者は306名でした。



●記録のなかの復興と再生 — 東北大学の戦災復興資料から — (6/13～7/31 企画展示室)

6月13日から7月31日まで、東北大学における戦災・復興をテーマとした企画展を開催しました。東日本大震災から一年を経過したいま、「復興」「再生」の名の下に、様々な人びとが格闘し続けていますが、その過程を記した記録を適切な形で遺し、未来に伝えていくこともまた、私たちにとっての重要な責務であります。そうした関心から、過去の大きな災害・復興の体験として戦災復興をとりあげ、その記録がどのように残されているかを紹介しました。

展示では、(1) 被災状況と緊急対応（空襲時の日誌、直後の会議録、写真など）、(2) 復興政策とその過程（復興委員会・評議会での議論など）、(3) 学生生活の復興（学友会の復興、音楽部復興関係資料、厚生会館＝北門食堂建設など）といったテーマごとに関連資料を紹介したほか、学科・教室単位での戦災復興記録がまとめて残されている事例として理学部物理学教室の戦災復興記録（林威文書）を紹介し、いわゆる公文書のみでなく、大学内での様々なレベルで、災害体験を意識的に記録し残していくことの重要性を述べました。展示の細かなみどころについてツイッターを使って情報発信をおこない、好評を得ました。期間中の来館者は494名でした。



資料の公開について.....

●個人・団体文書

小町谷操三文書

小町谷操三（こまちや そうぞう 1893～1979）は大正～昭和時代の商法学者です。長野県出身で、東京帝国大学を卒業後、海商法を専攻し、欧米への留学などを経て、1924年（大正13）に東北帝国大学教授となりました。1956年（昭和31）の退官後は、愛知学院大学教授や法制審議会商法部会委員をつとめ、学士院会員にもなりました。86歳で死去するまでに、『運送法の理論と実際』『海商法研究』など多くの著作を残しています。

文書の内容は、海上保険関係の著書の自筆原稿11点です。1969年5月に、菅原菊志法学部教授（当時）から寄贈されました。

塩釜伊兵衛文書

塩釜伊兵衛（しおがま いへえ）は、仙台高等工業教授、東北帝国大学理科大学観象取扱をつとめた、仙台出身の物理学者です。1897年（明治30）に第二高等学校を卒業し東京帝国大学に進学、卒業後の1907年（明治40）に仙台高等工業学校に赴任しました。東北帝国大学の向山観象所の「観測取扱」をつとめるほか、文部省在外研究員として留学生活も送っています。向山観象所は、大正元年に竣工した施設で、子午儀や赤道儀を備えていました。東北帝国大学天文学講座が正式に設置される以前、すでに天文学の研究・教育上主要な設備が存在しており、その草創期の天文学研究施設を支えたのが塩釜でした。

本文書の内容は、（東京）帝国大学時代のノートのほか、東北帝国大学向山観象所や仙台高等工業学校、文部省在外研究員の各々の時代に制作・収集された20点の資料です。2001年3月、田村眞一理学部教授（当時）の仲介を経て、ご遺族より寄贈されました。



豊田武文書

豊田武（とよだ たけし 1910～1980）は、東京都出身の歴史学者（専門は日本中世史）です。東京帝国大学文学部国史学科を卒業後、文部省宗教局などに勤め、1947年に東北帝国大学法文学部教授に着任しました。1973年まで在職し、その間に評議員も務め、定年後は法政大学教授に転じました。

本文書はファイル5冊からなる資料群で、豊田が収集した当該期の大学紛争に関する資料が主となっています。1969年前後の資料が最も多く、当時評議員を務めていた関係から学内の教授会、評議会で検討された議事や配布資料、自筆メモ等、その他学生ビラなど収集資料も含まれています。2010年に、東北大学百年史編纂室より212点の移管を受けました。

抜山平一文書

抜山平一（ぬきやま へいいち 1889～1965）は、東北帝国大学工学部で教授をつとめ、昭和10年（1935）の東北帝国大学附属電気通信研究所の設立以後、永く所長を務めた研究者です。電磁気、超音波、通信技術などの研究で知られ、また電波技術審議会会長などを務め、戦後の電波行政にも深く関わりを持ちました。そうした経歴により、本文書群には電気通信に関する図書や論文が数多く含まれています。また、専門的業績以外では、日本学術会議の委員や電波管理委員としての業務に関する文書も含まれています。

本文書群188点は、御遺族から東北大学電気通信研究所宛に寄附され、さらに2002年に同研究所横尾邦義教授（当時）を通じて、東北大学史料館へ移管されました。

**林威文書**

林威（はやし たけし 1904～1996）は、1943年（昭和18）から1967年（同42）の停年退官まで、東北（帝国）大学の理学部物理学第1講座（電磁気学）の教授でした。大学卒業から教授退官まで、東北（帝国）大学でX線分光学、金属・合金のX線吸収スペクトルに関する研究を中心に研究業績を重ねる一方、仙台空襲の際に焼失・損傷した理学部の施設・設備の復旧、教養部運営委員会評議員として新制大学の機構改革、教育学部からの教員養成課程分離や宮城学芸大学設置問題に関わりました。また理学部同窓会組織である自修会でも、参与及びテニスプレーヤーとして活動しています。そうした経歴に関わる9点の資料が、1967年（昭和42）の定年退官に伴い、ご本人より寄贈されました。

**細谷恒夫文書**

細谷恒夫（ほそや つねお 1904～1970）は、山形市出身の哲学者・教育学者です。1935年東北帝国大学法文学部に赴任し、教育学講座を担当しました。戦後の教育学部創設に際し初代学部長となり、1955年文学部に転じ哲学第一講座を担当、1962年には教養部長に就任しました。1967年に山形大学学長に転じ、在任中に急逝しました。

本文書は、東北大学における戦後新学制への移行等に関する検討過程で、細谷が収集した資料や作成した草案、メモ、他大学や文部省関係者との往復書簡等からなります。細谷は教育学部設置準備の中心的役割を果たすと共に、新制大学一般教育課程（特に文科系学部）のカリキュラム編成を主導するなど、新学制への移行において重要な役割を果たしたことから、東北大学の学制改革を理解する上で重要な内容を持つと言えます。

ます。そのため本文書の目録は、国立教育研究所が昭和35年度から38年度まで実施した科学研究費補助金による研究「戦後教育資料の収集に関する研究」の一環として、戦後教育資料収集委員会編『戦後教育資料総合目録』（昭和40年7月）に収載されました。

もともと教育学部の管理下に置かれていた資料350点は、東北大学百年史編纂事業の過程で同編纂室に寄託され、編纂終了後の2010年12月に史料館に移管されました。

史料館のうごき.....

◇ミニ企画展「東北大学の卒業式 - 大正から平成まで」(3/26-4/13)

卒業の時期に合わせて、本学の卒業式の様子とその変遷に関する企画展を開催しました。式辞・告辞、記念品、写真等の資料から、大正から平成までの卒業式の在り方や様子が感じられる展示になりました。

◇平成23年度の法人文書移管作業・平成24年度の法人文書評価選別を行いました。

今回は、平成23年度末に保存期間を満了した本部その他の部局の法人文書のほか、平成24年度満了予定の法人文書も範囲に加え、2年度分の評価選別作業を行い、そのうち保存期間満了分から約130点の文書をあらたに史料館に引き継ぎました。引き継いだ文書については、今後、内容等に関する点検調査を行い、特定歴史公文書等として公開する予定になっております。

◇「清風一過—大島正隆の歴史学と民俗学—」(第二回) (2012/6/4~28)

大島正隆（1909～1944）は、東北の地方史研究で先駆的役割を果たし、34歳で夭折した研究者です。史料館が所蔵する「大島正隆文書」は、昨年度に約470点の整理を完了しました。公開を記念して昨年9月末～10月初めに展示を開催したところ、会期が短かったにもかかわらずご好評をいただきましたため、このたび再度開催となりました。今回は推定200名前後の方にご来場いただき、また6/9には展示担当者（大島文書研究会）による30分ほどの説明会に、研究者や学生約30名がお集まり下さいました。戦時体制という過酷な状況下を、清らかな風のように駆け抜けた学徒について、今後も解明が進むことを期待したいと思います。



◇当館所蔵 小川正孝ニッポニウム関連資料が出陳されます。

当館が所蔵する小川正孝のニッポニウム関連資料が、国立科学博物館（7/21-10/8）で開催予定の「元素のふしぎ展」で展示されます。小川正孝は東北帝国大学理科大学長、東北帝国大学第4代総長を務め、「ニッポニウム」という元素の存在を発表した化学者としても有名です。「ニッポニウム」は同時代的には他の研究者から確認が得られず、日本人初の元素発見とはなりませんでした。後年小川が存在を発見したのはレニウムであったことが確認され、近年その業績が再評価されるに至っています。



重要なお知らせ

史料館の改修と一時移転について

今年度10月より来春にかけ、片平地区の東北大学史料館本館の改修工事をおこなうことになりました。

史料館本館は1924年に東北帝国大学附属図書館として建てられて以後88年を経過し、近年の耐震診断でも補強工事の必要性が指摘されていましたが、さらに昨年春の大地震によって屋根の一部が損壊し、恒常的に雨漏りが発生している状況でした。

今回の工事は①震災による被災箇所の修復や耐震強度の向上、②建物自身の歴史的価値の保全と復原、③東北大学の公文書館・歴史資料館としての機能向上の3つを目的に、東北大学の顔となる施設として今後永く活用できるようにするための、全面的な改修工事となります。

つきましては、工事期間の史料館業務を以下のようにさせていただきます。

● 閲覧室・事務室等は、附属図書館（川内キャンパス内）に一時移転いたします。

工事期間中は、事務室・閲覧室を川内地区の附属図書館2号館内に移転いたします。この川内地区への移転作業等のため、8月13日から9月末日（予定）までの間は、史料館（公文書室含む）の閲覧・複写利用業務等を一時停止いたします。10月以降は、図書館内にて閲覧室を再開し資料の利用ができるようになります。再開の期日については、決まり次第ホームページ等で告知いたします。

● 常設展示は、改修工事完了までお休みします

常設展示「歴史のなかの東北大学」、「魯迅と東北大学」は、8月13日から、改修工事が完了する来年4月（予定）までお休みいたします。こちらも、再開の日程等決まり次第あらためてお知らせいたします。

来年度には、復旧・新装なった東北大学史料館を皆様にお披露目できることができると思います。それまでの間、利用者の皆様にはご不便をおかけいたしますが、ご理解とご協力のほどよろしくおねがいいたします。



Twitter はじめました

東北大学史料館のツイッターをはじめました。アカウントは@T_U_Archives です。展示のみどころや新公開資料の紹介、イベント情報や東北大学の歴史に関するマメ知識など、どんどんつぶやいていきたいと思っております。是非フォローしてください。

※ Twitter は、140文字以内の短文を投稿・発信するネットワーク・コミュニケーション・サービスです。



@ T_U_Archives

東北大学史料館だより 第17号 2012年9月21日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 tel 022(217)5040

E-mail desk-tua@library.tohoku.ac.jp URL <http://www2.archives.tohoku.ac.jp/>